

シンポジウム全体へのコメント

テッサ・モーリス-スズキ

この二日間、1960～1980年代に展開されてきた古いタイプの「移民研究」の手法について、われわれはずっと考えてきたように思う。ここでは、古いタイプの移民研究の手法を「戯画化」しながら、何点か述べていきたい。

古いタイプの移民研究モデルの特徴は、「国家」が中心であること、移民がそれぞれの国家に入りこんでいくことにある。「国家」が移民たちに対してとる政策は、排他的なものであったり、同化的なものであったり、多文化的な政策であったりする。それに対して研究者は、そうした政策を考察していく立場におかれている一方で、研究者が、国家が打ち出していく政策に対して、よりよい方向に貢献していくことも少なくない。

本シンポジウムで議論されてきたように、人がたんに国家に入っていくのではなく、人が国家と国家の間に入っていく、といった多様な移動のありかたが存在する。また、人だけではなく、政策そのものも移動し変化するという点も明らかになった。たとえば日韓間の研修システムもその一例だし、アフターマティブ・アクションについても同じことがいえる。さらには、政策が移動するだけでなく、研究者も移動するようになってきた。それによって研究者はトランスボーダーな状況に置かれている。また研究者が移動することで、研究者が国家を見る視点も変化してきた。

研究者の移動によって、われわれ研究者がもつ基本的な概念も変化してきた。たとえばメンスキー先生のペーパーからは、移民にかんして、たんに法律をどう考えていくのかということではなくて、研究者の法律自体への視点も変わらざるを得ないということに気づかされた。つまり、「新しい法の登場によって、古い法が変化しなければならない」といった考え方だけでなく、そもそも「法とは何か」といった問いがでてくるようになるということである。研究者が移動することについて、自分がもう一つ感じたことは、伝統的な研究手法を捨てることが重要なのではなくて、複数の手法を結びつけることによって、新たな理論的基盤が生まれるのではないかということだ。

この二日間の議論のなかでは、「マイノリティとは誰か」「誰がエスニック・グループに属するのか」について触れてきたが、われわれはそれを定義することはしなかった。これらを定義するには長い時間がかかるので、このことはとてもよかったと思う。そうした定義は、ア・プリオリな私たちでは決定されない。エスニック・グループが誰であるのかは、流れ（フロー）のなかで形成されてくるものである。たとえば、尹さんが研究対象としている北アイルランドでは、「プロテスタントである」または「カトリックである」ということに、宗教的な意味だけでなく、エスニック・アイデンティティが関係している。また同様にオーストラリアでも、とりわけ 9.11 以降、ムスリムもマイノリティとして定義される

ようになってきたという変化がある。20年前には、彼らは、たとえば「レバノン人」などと定義されていた。

このように考えていくと、「国家」は単一なものとして考えることはできず、多様なものであることを忘れてはならない。冒頭で塩原さんが、オールドカマーとニューカマーとの相互作用について言及していたが、「ニューカマーの流入によって、オールドカマーが再び自分たちのアイデンティティを主張する」と単純に捉えてはいない。そこには、より複雑な関係性が存在していくのではないかと理解した。つまり、オールドカマーが活動しなくなった、主張しなくなったというわけではなく、もともとオールドカマーも活動し続けていたが、新しいグループが流入してきて彼らのアイデンティティ・ポリティクスを主張することで、さらにオールドカマーのアイデンティティが呼び起こされ、相互作用を生む、ということだと思う。これはコンフリクトを生むこともあるが、協力関係を生むこともある。そうした相互作用には多様なありかたがあると思うし、そこから新しい何か生まれるのではないかとも思う。最近の例をあげれば、ニューカマーであるオバマ大統領の当選によって、アフリカ系アメリカ人のコミュニティに対して大きな影響を及ぼした、ということがある。

教育についていえば、社会が多様化していくなかで、どのような教育政策を作り上げるかという問題から、教育とは何か、教育がどのように変わってきたのかという問題へと、われわれの問いかけが徐々にシフトしてきている。

もう一点述べておきたいのは、メディアの役割についてである。インターネットやサイバースペースの発展に代表されるように、メディアが多様化するなかで生じる問題についても、われわれは議論すべきだ。また、メディアを教育の一部として考えなければならないのではないかと思う。たとえば日本の場合、学校で多文化的な教育を受けたとしても、それで多文化主義の教育ができたという思い込みは、なるべく避けるべきだろう。学校で一日そうした教育を受けても、帰宅後に「2ちゃんねる」のサイトを見るという状況もあり得る。そうすると子どもたちは全く違う教育を受ける、ということになってしまう。われわれは、より広範囲にメディアを捉えていかなければならない。